

Sur Ashizurimisaki (Le cap d'Ashizuri) de TAMIYA Torahiko
—— Entre le récit et le cinéma

KAJIKAWA Tadashi

Nous tenions ce récit écrit en 1947 pour un des chef-d'oeuvres de la Littérature d'Après-Guerre. Mais avons-nous raison? Quand nous le compare à son adaptation à l'écran, ce chef-d'oeuvre se métamorphose en oeuvre de seconde classe.

田宮虎彦「足摺岬」について
― 小説と映画の間で

梶川 忠

田宮虎彦の小説「足摺岬」(初出・『人間』昭和十四年十月)は世評のたかい小説である。
たとえば、

田宮君の『足摺岬』は雑誌に出た時、読んで、うまい小説だと思っ
た。(志賀直哉「S君との雑談」一九五二年七月『中央公論』)

青山光二氏から聞いた話であるが、雑誌『人間』(略)編集長であ
った木村徳三氏が、その当時、原稿「足摺岬」を受け取ったあと、

「田宮がよい作品を書いたよ。名作だよ」

と、喜ばれたそうである。(中略)一九五二年『文芸』二月号は、
中里恒子、平野謙、武田泰淳など三〇名の文学者が「戦後作品ベスト
3」をおのおの選んでいるが、そのなかでは、森山啓、上林暁が「足
摺岬」をあげている。(中略)文章も過不足のないうまい水のような
見事な文体である。文学関係者以外でも愛読できるポピュラーになる
べき名作のすべてを備えている、と思う。

(山崎行雄『田宮虎彦論』(オリジン出版センター・九一年) p. 二二
二九―三三)

だが果してそうなのか。戦後という時代が完全に過去のものとなり、
戦後四十年以上つづいた昭和という時代の検討も始まっている現在にお
いても、この作品はその評価を維持できるのだろうか。

ひとつの例を挙げる。倉西博之は「『足摺岬』ノート」(『研究誌』
第十号・金欄短期大学・昭和五五年二月)の中でつぎのように述べてい
る。

田宮虎彦氏の代表作として世評の高い『足摺岬』を、二十余年に丁
寧に読みかえてみたが、これが果して「名作」と言えるのかと、疑
問を覚えた。どうやら、若年未熟の私は、作者のつぼを心得た語りく
ちに、手もなくいかれてしまったらしい。とはいえ、当年の私だけで
なく、世の活眼の士にして、今なおこれを「名作」として怪しまぬ向
きが多いのはどうしたことか。軽々に断ずることはできないが、世評
は多く好意的に過ぎるように思われる。

(p. 一)

拙論では、この「足摺岬」を、その映画化作品(昭和戦前のくらい社
会を懸念に生きようとするわかい男女のメロドラマ)と比較してみる。
小説よりも客観性を要求される映画が、小説の何を取り除き、何を付け
加えたかを検討することで、私が小説「足摺岬」に抱いた疑問、なぜ足
摺岬なのか、なぜ自殺しようとしたのか、なぜ老遍路が唐突に黒菅藩の
むざんな過去を語り始めるのか、どうしてヒロインになるはずの八重は
影がうすいのか、などを考察してみたい。さらにこの奇形小説がどうし
て戦後たかい評価を受けてしまったかを推測してみたい。

I

まず、けっして多くの人が見ているとはいえない映画「足摺岬」(近代映画協会作品・監督吉村公三郎・脚本新藤兼人・昭和十九年五月封切り・一〇七分)を、できるだけ忠実に要約しておく。

東大の安田講堂を背景に「昭和九年冬／日本が暗い谷間へ／足をふみ入れた頃——」の文字。

留置所の浅井政夫(東大生)が窓から扉をみていると、看守の声がする。アカで捕まったというヒソヒソ声。引き取りにきた母と神田界限を浅井が歩いていると、新聞配達少年福井義治に声をかけられる。

浅井の下宿(窓をあけると墓場)。浅井の好物である栗と揚げ菓子(母は風呂敷から取り出す。父の怒りを心配する浅井。「おまえが大学を出てくれさえすれば」「わしゃそれだけで生きている」「お父さんがどうしておまえを憎みんさるのかさっぱりわからん」などという母の訴えかけ。それに対し、無理に五円を送らないように、長生きをするように母に願う。

近所の食堂で働く八重(新聞少年の姉)の声が、隣室から聞こえる。留守中に洗っておいた浅井の下着を渡してくれる。二人はほのかな好意をもっている。

母を送っていく途中で、学生の軍事教練の列が通りかかる。帰宅した浅井は、仕事にでかける坪内(「菊坂」)と玄関で会う。以下、映画の常套手段である人物紹介。カリエスで寝たきりの少年文春(「絵本」)と話す。ミシンを踏んでいる、その父広瀬(「絵本」)からは先月分の下宿代を請求される。左翼の経済学者松木(「菊坂」)からは慰められる。学生の緒方(「菊坂」)からも慰められる。二階から女給の嬌声とギターで「影をしたいて」をつまびく学生香椎の笑い声

(「菊坂」)が聞こえる。新聞配達から帰り、夜学へいく準備をしている福井に、浅井は土産の栗を、仕切り板の上から渡す(「絵本」)。かれらは一部屋をさらに区切って借りているのである(「絵本」)。栗を食べた浅井は、咳をしながらかり切りのため机に向かう。軍隊の消灯ラッパが聞こえる。夜中、浅井の鉄筆の音に聞き入る文春(「絵本」)。

(一日終了)

贈写印刷明文社(「絵本」)に昨夜の原稿をもっていくと、浅井は主人から「駄目じゃないか、おまえのは百枚も刷らぬうちに、こんなに破れてしまったんだぞ」となじられる(「絵本」)。卑屈な浅井は首をすくめ、刷り上がった分をもって、医大へ謝りにいく。だが助手が遅れるのをまったく気にしていない(「絵本」)ので、生色をとりもどした浅井は、歓びのあまり廊下のバケツをひっくりかえしてしま

う。八重の働く食堂で朝食兼用の食事を浅井がしていると、出前から帰った八重が、他の客が手をつけなかった皿を差し出してくれる。そして食べながら、主人から先月分のツケを払うように求められる。食堂を出た浅井の後を、出前にゆく八重が追いかけて、二人の会話が始まる。陸橋↓人通りのない坂道↓墓地と徐々に暗い方への道を辿りながら、八重の兄が肉弾三勇士の廟行鎮で捕虜になって、銃殺されたこと(「絵本」)、高知の田舎ではひどい噂が飛んで、住んでいられないこと、弟だけは大学へ行かせてやりたいこと、浅井をたよりにしていることなどを打ち明けられる。

いささかいい気分で浅井が帰宅すると、せまい中庭には特高がたっており、松木の部屋に消える。縫い物をしている松木に、「国家意識に目覚めよ」「便所くさい下宿を出て、女房をもらえ」などと勧める(「菊坂」)。二階からは男のギターに合わせ、女の歌う「影をした

いて」がきこえる。特高は浅井の部屋も訪れ、「おまえも要監視人だから、ちよくちよくお邪魔する」と脅す。

印刷所をしくじった浅井は、業界紙の広告募集の仕事があると坪内に教えられ、誘われるままに、桜鍋をつつく。浅井の打ち明け話。小山田教授の授業のとき、「留学中は、母親を騙して、毎月二百円で十分なのに、五百円送らせたい」という自慢話に他の学生は笑ったが、浅井は来てはならないところにいるような気分を襲われ（「絵本」）、教授、大学に憎しみを覚え、出席する気をなくしてしまった。酔って帰宅した二人に、下宿の主人が「坂の上で強盗事件があった」と告げ、そのついでに浅井に下宿代を払うように求める。「仕事が見つかったからすぐ払う」

（一日終了）

広告の集金にいった浅井は、けんもほろろの扱いを受け、追い返される。自信を失った浅井は、友人の西野のところに金を借りにゆく。豊かな蔵書に囲まれた下宿で、パイプをふかしながらコーヒを飲んでいる西野から「きみに金を貸すのは無意味だ」と断られ、屈辱にふるえる（「絵本」）。土砂降りの中を下宿に帰ると、新聞配達達の福井が強盗の容疑で引っ張られた（「絵本」）ことを広瀬夫婦と松木が話題にしている。内儀は「人は見かけによらぬ」とすっかり犯人あつかいである。八重は食堂で泣いている。

（一日終了）

坂道を駆け降りる広瀬の妻は興奮しながら「福井さんが泥棒なぞするものかね」と叫んでいる。八重と浅井に抱かれるように、福井が下宿に戻ってくる。苦学生、捕虜の弟ということを手ひどい拷問を受けた福井（「絵本」）は、自室で泣き崩れる。寒風吹きすさぶその夜、浅井は福井がいけないことに気づく。主人夫婦、松木などと近所を探すと、裏の墓地で自殺している（「絵本」）のを発見する。浅井が食堂

まで連絡に走ると、八重は崩おれる。

（一日終了）

高知に帰る八重を見送る浅井。咳き込むので、医者にかかるように八重が勧めると、みてもらうのが怖いと気弱に浅井は答える。東京駅までいくと涙が出るというって、浅井はお茶の水駅で八重と別れる。

（一日終了）

梅の花が咲きだす頃。帰宅した浅井は電報を受け取る。「ハハシス、カエルニオヨバナ」（「菊坂」）。そこへ下宿のおばさんが、母からの小包をもってくる。栗を握りしめながら「父の本当の子ではない」「父はぼくを憎んでいる」「母は父に苛められどおしだったんだ」などと叫ぶ。急に雨が降りだす。特高がやってきて松木を連行する（「菊坂」）。香椎と女給の笑い声が聞こえるので、かっとなった浅井はおしかけて、女給を殴り、香椎と喧嘩する（「菊坂」）。その間に、浅井は嗜血する。自室で布団に横たえられた浅井は、医者を呼ぼうとする坪内に、金がないから、と呼びかける。

（一日終了）

（これが前半のクライマックスである）

質屋にすべてを売った浅井は、古本屋で絵本を買う。帰宅した自室にはすでに次の下宿希望者を案内するおばさんがいる。カリエスの文春に「アンデルセン童話集」をプレゼントする（「絵本」）。

（一日終了）

汽車↓船↓バスと乗り継いだ浅井は、雨の中、八重と母が世話になっている、叔母の営む遍路宿清水屋に到着する。かまどをみている八重に到着を告げた途端、浅井は倒れこむ。老遍路とオイイチの薬売りがある部屋のつづきに床をとる。二人は浅井の様子をうかがいながら、将棋をする。薬売りから高価な薬を与えられる。二人が夕食を食べる階下におりると同時に、八重がお膳を運んでくる。食欲のない浅井の

額に手を当て、ついで額を押し当てる。「足摺岬に飛び込んだら、死体は上がったくないそうですね」と浅井。

(一日終了)

雨降り。将棋に興ずる二人。その背後に空っぽの浅井の布団。身投げではないかと思つた老遍路は、階下でおかみに相談する。そこへ八重が帰ってき、八重、薬売りが岬の方へ走りだす。老遍路が雨に祈っていると、浅井を背にした薬売りが戻ってくる。布団に横たわる冷えきつた浅井に、八重は口移しで薬を飲ませる。その夜、意識を取り戻した浅井は、枕元の八重に話しかける。八重に一度会つてから死のうと思つて、足摺岬にやってきましたこと、ところが八重に会つたから、足摺岬に行つても、死ねなかつた。「死のうと思つた心では、本当はあなたに会いたかつたのかもしれない。だからぼくの本当の心は、あなたに会いたければかりだつたのかもしれない(八重の手をとつて)八重さん(間)あなたといっしょに生きたい」それに応え、八重は一度顔を背けてから「あなたのいらつしやるのが一週間遅かつた」と告げ、泣きながら階下に逃げ去る。二人のやり取りを隣室で聞いた老遍路が、結婚の決まつたことを告げる。八重の父親は天皇陛下に申し訳ないと自殺した、その他はこの辺に隠れるように住んでいる、だが隣村の有力者に八重が嫁ぐことで誹りも薄らぐだろう。

(一日終了)

晴れ上がった翌日、木漏れ日の中を二人は散歩する。椿のアーケードが途切れると、目の前に海が日光を浴びて輝いている。二人ははしむじみと話す。八重も何度も岬に立つたことがあるが、「死ぬなんてことどんな理由があつてもやはり負けることなんですね」浅井「(間)幸せを祈ります」八重「ありがとう。でもね、浅井さん(間)あたしね、考えたの。人間って、自分の幸せのためにだけ生きてるんじゃないって。ただそれには(他人のために生きる決意をすることか?

浅井を諦めることか? —— 筆者) 少し勇気が要りますわ。あたしのようなものは、運命を切り開いていくような力はとつていありませんわ。ただ流れの中で一生懸命生きるだけですわ」頷く浅井。

(一日終了)

帰る朝。薬売りや老遍路も出立する。浅井はまだなにかを八重に訴えようとすが、口には出せない。玄関で叔母に八重の花嫁がたをみるように勧められる。二人は握手して別れる。「真面目に生きようとする者が、死にたくなつたりするもんじゃ」と二人をみながら老遍路が呟く。バスの窓からきらきら光る海をみつめる浅井。気落ちしながらも、部屋の掃除に取りかかつた八重は、浅井のシャツが残っているのに気づき、後を追うが、バスはもういない。涙を溜める八重。浅井はつよい意志のもどつた顔で前方を見つめている。

(一日終了)

これは筆者がビデオを参照しながら要約したものである。また傍線は、カッコ内に記しておいたように、「絵本」(昭和二五年五月『世界』初出)と「菊坂」(昭和二五年六月『中央公論』初出)にあるエピソードであることを示している。つまりこの映画は、田宮の「本郷もの」といわれる三つの短編をほぐして再構成したものと見える。

前半では、本郷にある富士見軒という下宿屋に出入りする様々な人々(若者が多く、また洋服の人間が多い)を描き、後半では、足摺岬の遍路宿に滞在する人々(老人が中心であり、和服が多い)の言動を描く、いわゆるグランドホテルものである。

そういう人々の間で、互いに密かに惹かれあうヒーローとヒロインが世間に抗しつつ、ついには別々に東京を離れる。かれらは東京では敗残者である。足摺岬でのふたりは、ともに別個に死の淵までいくのだが、生の側に戻り、ヒロインは家族を少しでもいい状態にするために自分を犠

性にする道を選び、ヒーローはそんなヒロインに励まされ、ふたたび東京に帰還する。つまり足摺岬は死と再生の場になっているのだ。ヒーローの前途になががあるのかは描かれないが、苦難の道が待っているのは予見できる。

あるいは桃源郷と現実（東京）とを行き交う男の話であるともいえる。若者たちが少しでもいい暮らしを将来に期待して、今を必死に生きている（典型が福井少年であり、経済学者の松木でさえ左翼の勝利する未来を確信している）東京で自分に絶望した浅井が、足摺岬の遍路宿で、他の区別なく互いに助け合って生きている老人たち（貧しいけれど自足と安らぎがある）と接するとともに、あくせく生きていた自分を抜け出す。八重は桃源郷から福井を助けるために姉として現実に下りてきた天女である。だから彼女の現実における役割が中断された途端、彼女は桃源郷にあっさり戻ってしまふのである。そして彼女は別世界の男を選択し、結びつく可能性のあった現実の男・浅井を拒否して、別世界にのこる。彼女が浅井と東京に帰ったとしても、かつてと同じように自分の役割が突然中断する可能性があるからである。（小説に寄りすぎているかもしれないが、東京の八重は「しがない」生活しか送れない）

これは典型的なメロドラマである。しかしメロドラマとして見事に成功している。文字では表現できないのだが、伊福部昭の叙情的な音楽と宮島義勇の白黒の光と影を微妙に生かしたカメラワークとがドラマを盛り上げ、浅井を演じた木村功の線の細い青年像も、「あの暗い時代にあつて、まさに『光明』の象徴であつた。女優津島恵子としてのこれが頂点であつた」（「日本映画俳優全集・女優編」と評された津島恵子の健気さもすばらしい）。

もっともこの作品は決してたかく評価されていない。昭和二十九年が「七人の侍」（黒沢明）、「二十四の瞳」（木下恵介）、「近松物語」（溝口健二）、「晩菊」（成瀬巳喜男）など、日本映画史に特記すべ

き傑作ぞろいの年であつたことを割り引いても、あまりに無視されている。雑誌『キネマ旬報』のベストテンでは十位にも入っていないのである。評論家でたかく評価したのは、朝日新聞の井沢淳だけであつたという。（水谷憲司「文学の映像詩」（永田書房・一九八二年）p. 一八五による）この「文学の映像詩」中の、水谷の評価をすこし記しておく。

この頃、私は大学に入ったばかりの時だっただけに、主人公の、時代こそ違え、浅井青年の生きざまに共感するところが多かつた。

（一八一）

少々メロドラマ的要素があるものよくまとめられた脚本だと思う。

（一八二）

新藤兼人と吉村公三郎による映像思考は新しい創造の世界を確立して、見事というほかない。ただ、ラストの処理については封切り当時、すこし問題にされたようだが、浅井が再び生きる意志を持つという処理は甘いといえそういえるかもしれないが、映画としてのラストはあれで十分だと思つている。（一八五）

II.

小説「足摺岬」は、四百字の原稿用紙で六十枚くらいの短編であるが、それにもかかわらず、四つの時間が存在している。しかも次ページの表に見られるように、「I」の時間が大部分を占めており、いちじるしくバランスを欠いた構成になっている。（映画は、この四つの時間の内で、「I」のみを分離して膨らませているのである）「足摺岬」の時間が四つに分かれていても、中心が「I」の時間であることはいうまでもない。一人称で語られる小説であり、「私」が語り手の地位に甘んじているのではない以上、主人公にして、語り手である「私」を分析しなければな

小説「足摺岬」の時間

<p>I 主人公「私」が初めて足摺岬を訪れる時間。(この中には回想として、東京で惨めな暮らしを送る時間も含まれているが、重要ではない)(一九二八か九年あるいは一九三三か四年)</p>	<p>六二二行</p>
<p>II 老遍路が語る、戊辰戦争の時(一八六八年)からIの時間まで</p>	<p>四三行</p>
<p>III Iの時より三年後にまた足摺岬を訪れ、八重を東京に連れ帰ってから過す十年あまりの時間(一九三一か二年あるいは一九三六か七年から一九四一か二年あるいは一九四六か七年まで)</p>	<p>十八行</p>
<p>IV 戦敗の翌年(一九四六年)に足摺岬を訪れる時間</p>	<p>七九行</p>

(註) (I)と(III)の時間について

(IV)の時間で、その時「横なぐりの雨が十七八年前と少しも變らぬ町並みの低い檐を叩きつけていた。」(357)とあるのを考慮すれば、(I)の時間は一九二八か九年ということになる。また(IV)の時間では、特攻帰りの八重の弟龍喜が二十歳過ぎ(同右)と書かれており、(I)の時間には、龍喜は三、四歳で母親の乳房をしゃぶっていた(353)とあるので、整合性をもっているようにみえる。

ところがもうひとつ老遍路を中心とする時間軸が存在する。

(III)の時間の「三年後にまた足摺岬を訪れ」たときには、老遍路は八六か七で行方不明になっている(357)ので、(I)の時間には八三か四(「八十の坂をとくに越え(346)ている」)である。

ところで老遍路は戊辰戦争の時、十八歳であった(つまり一八五一年の生まれ)(355)のだから、(I)の時間は、一九三三か四年ということになってしまふ。しかし(III)の時間(八重は戦時中に死ぬ)は(IV)の前でなければならぬから、老遍路を中心とする時間軸が間違っているということになる。

さらに、一九四九年に発表されたこの小説は、十七八年後に回想する(「それは(I)の時間——筆者、もう十七八年も前のことになる。」(346))という設定になっているので、老遍路を中心とする時間軸でみると、回想しているのは一九五〇か一年ということになり、SF小説になってしまうのである。

しかし最初の「(I)の時間は一九二八か九年」という前提立っても、老遍路は一八四五年の生まれとなり、これでは戊辰戦争の時には二十歳を越えているのである。

つまり時間に齟齬が生じているのである。だから倉西のように「昭和九年頃」に設定されていると考えて、ほぼ間違いない。(7)と速断すべきではない。もちろん私小説として読むなら、「私はまだ大學をあと二年近く残していた。」(346)「その時、私は二十三歳だった。」(348)という文章があるので、一九三四年と考えられる(映画ではこれを採用している)。だが私小説ではない。

「落城」の連作で生み出した黒菅藩という架空の藩に執着しすぎて、年代の計算を間違えてしまったのだろう。しかも作品中で黒菅藩の挿話は余りに唐突であり、絶叫としての迫力はあっても、小説としての効果はない。

らない。

東大生であった「Ⅰ」の「私」の特色は、極端に無口であることである。「私」の会話に関する箇所を抜き出してみる。

- (1) 私がひと晩とめてほしいというと、 (346)
- (2) だが、私はそれにも答えず、 (347・内儀に話しかけられ)
- (3) 私はその言葉にうなずきだけかえして、 (349・内儀の「馬鹿なことではせんもぞね」に対して)
- (4) 私は三人に何かいおうとしていたようだった。だが、それが言葉になつたかどうかはしらぬ。 (349)
- (5) 私はかかわりもなく遍路に
「雨は……」
ときいていた。 (350)
- (6) 私は淋しさにたえかね
「おじいさん、何時か唄つたアイヌの唄をきかしてくださいよ」といつた。 (355)
- (7) 私は丸薬をくれようとする遍路に
「おじいさん、もう薬はいらん、痛みも治つたし、熱もない」といふんだ。 (351)
- (8) 私はそれをこぼみながら、やつと
「おじいさん、私には、その薬代を拂う金がに」といつた。 (351)
- (9) 私は薬賣りに生命を助けてもらつた禮を述べべきであつたはずだ。それはわかつていながら言葉にはならなかつた。 (353)
- (10) だが、八重はひとこと何をいうでもない。だまつてそれを私にくれたのであつたし、私もまたそれを無言でうけとるのだつた。 (353)

「私」が積極的に話しかけるのは、(1)と(5)と(6)の三回だけである。しかも(1)は遍路宿に到着したときに、宿泊可能かどうかを尋ねるといふ、社会生活において当然なされねばならない話しかけである以上、厳密には二回だけということになる。

(5)の「雨は……」は、雨の中で死に場所を求めたために死に損なつた「私」にとつては、一番気掛かりな(雨が止みさえすれば、希望どおり自殺することができるかもしれない)ことであり、また(6)の老遍路への依頼は、「Ⅱ」の時間を引き出すためのきつかけの役割を担っているのである。

また(7)と(8)では老遍路に口を利用してはいるものの、拒絶のために仕方なく喋っているのであり、本当は話したくないのである。

そして右の四つの会話の特徴は、いずれも老遍路との間のものだといいうことである。

遍路宿には、他に内儀、オイチニの薬売り、八重、幼い龍喜がいる。内儀は「私」に三回話しかけるのだが、三度とも「私」はそれに答えなない。オイチニの薬売りも「私」に四度話しかけるのだが、二度は、

「これで治るぞね、これでじつき治るぞね」 (350)

「忘れずにのむぞね、これでじつきに直るぞね」 (351)

という、いわば普通に薬剤師が客にいう言葉と同然(ずっと心情あふれるものではあつても)であるから返答なしでもかまわないが、

「學生さんよ、治つてよかつたのう、生命は粗末にせられんぜよ」といつてから、つと私の耳もとに口をよせると小聲で

「薬の金があるもんか、おぬしはそれを心配して薬をのもうとせなんだつうが、そんな気兼ねをするで死にとうならあね」と早口につけ加えて聲高に笑つた。 (353)

という別れに際しての思いやりに満ちた言葉も、(9)のように無視されてしまうのである。

将来の女房である八重はどうか。(10)にみられるように最初は口を利かないまま「私」に奉仕するのであるが、しだいに喋るようになる。しかし八重の言葉が直接話法で記される箇所は一か所もないのである。例えば父親伊之のことや、父親が連れてきた老遍路のことを「私」に物語りはするのだが、それを聞いた「私」が間接的に語るといふ形を取っている。つまり読者は八重の「肉声」にまったく触れることができないのである。会話に關していうなら、(IV)の時間で二回口を利く龍喜以下のあつかいを受けているのである。

ではなぜ八重はこのような扱いを作者田宮から受けねばならないのか。八重は、作者にとって登場人物である必要はないからである。戦後になって、「私」に衝動的に足摺岬を再訪させるきっかけになりさえすればよいのである。

だから谷沢がいうように(前掲書、234-6)(III)の時間の東京における八重とのくらしを、作者は無責任に「しがない歲月」(357)と表現できるのである。八重を登場人物として扱おうとするなら、映画のようにもつと丁寧に描かねばなるまい。小説としては、(III)の十年あまりをもつと詳細に展開する必要があるだろう。

「私」はなぜ老遍路とのみ口を利くのであろうか。「足摺岬」における重要な叫びを引き出さねばならないという理由は考えられる。しかし同時に、内儀、オイチニの薬売り、八重、龍喜たちがしがたない庶民であるのに対し、老遍路は武士であるということも考えられよう。

「私」は東京で「Kという出版社をたずね」「Yという社長に」「私のしごとをたのんでみようとした」のだが、「K社ビルのまわりをただうろつろつ三時間近くうろつ」いて、結局よう訪問しなかった。(350)

これを谷沢は「私」としては全く理解を絶する異常な行動である。「(『足摺岬』私注)(『標識のある迷路』(関西大学出版部・昭和三五年) p. 232)と呆れているが、「私」は精神の自恃をきわめて強く意識するエリートであるから、「武士は食わねど」という誇りをもち、自ら頼み込む屈辱に耐えがたかった。精神の貴族たるべく、膝を屈することをようしなかったのである。そして自分の孤高を守るためにも、東京でも、ほとんど誰とも喋ってはいないのである。

宿に到着した頃の「私」にとって、「遍路も薬賣りも路傍の人にすぎなかった。」(348)しかし雨の中を岬に出かけ、びしょ濡れで戻った時に、「何時の間にか遍路が薬賣りの後ろに立つて、何か罵りながら薬賣りとお内儀とを指圖していた。」(349)そして病気になるまで「ふつと私はゆりおこされていた。遍路が私をのぞきこんでいるのだった。」(350)と面倒をみてもらう。床の中から「私」は二人が酒を酌み交わすのを見る。「遍路の方は長い膝をあくぐらにかまえたまま、薬賣りのさす盃を幾らでも重ねていた。遍路のその姿はどれほど飲もうと微塵もくずれをみせなかった。」(352)さらに「その裸の右の肩口に、ひとすじ無惨に走っている刀創の痕をうきだたせていた。だが、(中略)眼だけは老いた鷹のようにするどく光つてみえた。」(345)遍路は他人を指圖する人間であり、立ち居振る舞いは正しく、肩口の刀創の痕は、まさしく武士であったことを示している。

「私は自殺しようとしていた。何故、自殺しようと思いつめていたのであろうか。死のうとしたその時でも、理由ははつきりとは言えはしなかっただろう。何となく死にたかつた。理由もなく死にたかつた。」(346)という表現に見られるように、この小説ではなぜ自殺しようとしたのか、は明らかではない。そして谷沢はまた、死ぬ理由の薄弱であることを非難しているが(前掲書、227-9)、これも自分の矜持を充たしえないから、精神の貴族としては、この世に見切りをつけ、足摺

岬に自殺するべくやってきたのだと考えればある程度納得がいく。

小説が自殺行までのプロセスをまったく描いていないのに対し、映画は一時間以上をかけて、主人公が追詰められていく様子をこれでもかと描いている。

映画の浅井は内面に自恃を秘めているのかもしれないが、むしろ貧乏に挫けそうになっている学生である。浅井は単屈に腰をかかめる術を知っており、さらに東京では多くの知人に囲まれ（坪内は仕事の口を紹介してくれ、浅井は実際に働いている）、八重や弟の義治には頼りにされているのである。雄弁ではないけれど、人付き合いを厭う人間ではない。

III

「何度も乗り換えのある面倒な長旅をして「足摺岬」を訪ねるまでもなく、手近にもっと手頃な場所がありそうなものである。してみると足摺岬をえらんだのは「私」ではない。つまり、作者が——作者の都合が、この物語の舞台として足摺岬を必要とした、というのが真相であろう。」（前掲・15）と倉西もいのように、なぜ足摺岬でなければならぬのか、についてはまったく説得力をもっていない。

では作者田宮は、自分も訪れたことのない（田宮さんはそれでも映画をいくらか気に入ってた下さったようである。試写がすんで、ぞろぞろ人たちが会場から出てくるなかで一言いわれた。『足摺岬って案外いいところなんですね』」（吉村公三郎「キネマの時代」（p. 348））足摺岬へ、なぜ「私」を行かせたのであろうか。東京で食うや食わずのくらしを送る胸を病む学生に、なぜ汽車や船を乗り継いでわざわざ地の果てともいふべきところへたどり着かせるのか。どうせ自殺するならば、伊豆半島や華厳の滝に飛び込ませた方が手っとり早いはずである。

徳川へのうらみを叫べる人間を登場させるためであった。近代の日本

を厭い、陰を生きてきた人間が必要だったのである。そういう人間を東京の近辺に住ませたのでは具合が悪い。近代日本の中心である東京からできるだけ隔たった辺境の地、それなら「人外の地」「鬼国」といわれた土佐はもっとも相応しい土地の一つであろう。

しかも黒菅藩の同志やその家族たちの菩提を弔うためには、庵を結ぶという生き方もあるものの、ところが人里はなれた庵を貧乏学生が訪れるのは、不自然なのである。お四国さんをまわる遍路と、遍路宿で出会うという設定は、その点きわめてすぐれたアイデアといえるであろう。

すでにこの「私」が、単なる語り手ではなく主人公であると述べたが、実はこの老遍路を主人公と見なせば、「足摺岬」は、同時期（一九四八年から五十年）に書かれていた、戊辰戦争における黒菅藩の悲劇を扱った連作「落城」の後日譚であるともいえるのである。もちろん実際の小説がそう作られているということではなく、作者がどうしても登場させたかったという意味においてであるが。

それならどうして物語の時間を狂わせてまでして、このもと黒菅藩の老遍路が姿をみせねばならぬのか。

「（前略）黒菅三千の魂が生きながらのいのちをささげたかんじんかなめの徳川様は公爵様におさまるし、世の中は黒菅などにかかわりもなしに移り變つていったよ、僕は、そして死んだ奴等はいつたい誰のために戦をしたのだ、二十年の僕の苦しみは何のためだったのだ、黒菅のくの字も忘れられてしまつてみれば、死んだものの浮ぶ瀬はどこにあるか、（後略）」（355）

自分たちは全滅するほどの戦いを繰り広げたのに、そのために戦ったお人は滅亡するでもなく、世が変わってもものうのうと生き延びている。

この自分たちが信じて死んだ人間に裏切られた老遍路の叫びこそ、田宮

が、唐突を覚悟のうえで、どうしてもここに挿入したかったものなのである。

そしてこれがラストの龍喜の叫びに対応しているのはもちろんである。

「誰のために俺は死にそこなつたんだ、負けたもくそもあるか、俺はまだ負けておらんぞ、俺に死ねといった奴は誰だ、俺は殺してやる、俺に死ね死ねといった奴は、一人のこらさずぶつたぎつてやる」

(558)

特攻で死に損なつた龍喜と将軍のために戦って死ねなかつた老遍路は、ともに大儀に殉じようとして、果たせなかつた人間である。八十年の間を間に、一方は近代日本(帝国)の成立時に、準拠する集団の頂点に裏切られ、もう一方は近代日本の崩壊時に、準拠する集団の頂点に裏切られたのである。

この二つの叫びを結び付けるためにのみ、八重の生涯はあつたといえるのである。

八重の小さなアルバムをみつけた。白鳥が池におよいでいる幼い表紙の繪が、八重が生きていた時のままであつた。私はその頁を一枚一枚めくつていたが、ふと、八重が、弟の龍喜を抱いた母親のおちせと劍士のような遍路と、人のよい笑いをうかべた薬賣りにとりかまれてうつつている寫眞に眼がとまつた。(中略) 汽車はまだ不自由であつたが、私は思ひたつて足摺岬までの切符をかつた。(357)

「私」が八重と結婚していなかったら、八重のアルバムをみることはありえず、すると老遍路を思い出すこともない。そうでなく、ふと連想することにはあつても、わざわざ鉄道の混乱している時期に足摺岬までいき

はしない。だからこの二つの叫びを結び付ける連結器として、八重は欠かすことができなかつたのである。

しかも八重が元氣であつたならこんな厭世的な気分にならず、むしろ戦後の生活に追われるままに老遍路を思い出すこともなかつただろう。

「八重の墓にいそ」(同右) いでいくから、龍喜の叫びを耳にすることができるのである。

「足摺岬」の比較

主人公	小説	映画	
八重	「私」(一人称)	浅井政夫(三人称)	
物語の時間	「私」と足摺岬で出会い、東京で「しがな」夫婦生活を送るが、死亡する。存在感はまったくない。	東京で浅井と付き合うが、弟の死後、帰郷。足摺岬で再会するが、すでに他家に嫁ぐことが決定。	
東京のくらし	誇りが高すぎて、大学を出ても虚しい人生し	要監視人になる、仕事をいくつつかしくする、	
	一九二八年から十七八年(あるいは一九三三年から十七八年)	一九三四年の冬から翌年の春まで	

			足摺岬にいく原因 (自殺趣味?)	か残されていない? (「むなししい」という言葉が頻出するが、実態は不明。	大学では来てはならない所にいるという意識をもつ↓卑屈↓憎しみ。友人から見捨てられる、隣の苦学生の自殺、八重の帰郷(自分の世界が失われる)
		なぜ足摺岬か	不明(飛び込んだら上がらない?)		母の死、貧困、胸の病、尊敬する左翼の学者の拘引(心の拠り所を喪失)
	足摺岬にて	八重と肉体関係をもつ			密かに愛する八重がいる。
	老遍路	佐幕の黒菅藩の生き残り、徳川家への恨みを抱いている。			生きる意欲をもつ。 人生経験豊かな老人。

絶対君主制であるかどうかは別にして、日本帝国の八十年を、この二つの生々しい叫びでくくって(小説の評価とは別に、このアイデアはおもしろい。ただしこれを生かすためには本来もっと丁寧に設定する必要

がある)、大儀に殉ずることの虚しさ、上に立つ人間の冷酷さを訴えたところに、この作品が評価されたポイントがあるといえるであろう。

この純な叫びに比べれば、「私」が自殺したがる理由も、八重の人物造形の欠如も、田宮にとっては問題ではなかったのだ。

小説としては四つの時間のバランスを欠き、稚拙にして杜撰とでもいふべき「足摺岬」が、戦後文学の代表作のひとつに数えられるのは、まさしくこの叫びが、昭和二十四年という時点における読者にストレートに伝わり、共感をよんだからである(先程と矛盾するようだが、戦後が生々しかったこの時点においては、「足摺岬」が緻密に設定されていたなら、時代の雰囲気と素直に感応できずに、評価されなかったかもしれない)。

小説「足摺岬」が幸運な作品というなら、映画「足摺岬」は不運な作品である。昭和二十九年(昭和二十五年に始まった朝鮮戦争を奇貨として戦後日本は復興し、翌三十年には、石原慎太郎の「太陽の季節」が評判を呼び、「もはや戦後ではない」といわれるのである)の時点においては、もはやこのような生の叫びは共感をよびようもなく、「私」と八重を主人公にしたメロドラマにせざるをえなかった。それを他の作品で補強して、脚本はよくまとまっているし、すぐれた映画に仕上がっているのだが、昭和九年の貧しい大学生と出前もちの娘の恋愛ものでは、原作小説のようなたかい評価を得るのはすでに不可能であった。

しかし今この映画を芸術作品としてみるならば、決して鑑賞に耐えないものではない。すでに述べた音楽やカメラや脚本ばかりでなく、スタッフやキャストのこの作品にかける意気込みまでも感じられるものである。

小説「足摺岬」は数十行の生の叫びでもって、「不朽の」評価をえた奇妙な作品である。今必要なのは戦後というベールを取り払って、等身大の評価をすることであろう。

「足摺岬」のテキストは「現代日本文学全集」第七七卷（講談社・昭和三五年）により、ページ数のみを記す。